川崎医会誌一般教，30号：7—34(2004)

「リラの花咲く頃－遠き訪ない－」(翻訳)

川崎医科大学 外国語教室
永 末 和 子

(平成16年9月30日受理)

Übersetzung: Holunderblüte Eine Erinnerung aus dem „Hause des Lebens"
Von Wilhelm Raabe / übersetzt von Kazuko NAGASUE

Kazuko NAGASUE
Department of Foreign Languages,
Kawasaki Medical School,
577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192, Japan
(Received on September 30, 2004)

[翻訳に先立ち]

ラーベの作品は日本語に翻訳されることが少なかったので，知る人は少ない。この作品がプラハを舞台としていることから，1986年，19世紀のヨーロッパの都市を横断的に扱う企画がなされた際，この作品に想をえて，画家フーゴー・シュタイナー=プラークが八葉の石版画を製作し，そのシーンの文を抜粋して画集に添え，訳が出版されるということはあった。『プラハ・ヤヌスの相貌』(平田達治・平野嘉彦編／国書刊行会）に納められているのであるが，近代ヨーロッパにおけるユダヤ人の役割と立場に関心をおもちの方はお読みになられるとヨーロッパの歴史の深みの一端を手になさることでありましょう。

ともあれ今から訳出しようとする作品は，それ自体の構成のよさとテーマの深みとからラーベを知る人々の間では夙に人気の高い作品であった。と同時に，作家自身もお気に入りの作品であり，事あるごとに言及し，また撰集の機会が訪れると，彼自身の手でしばしば選ばれた作品である。そうした客観的な評価とは別に，私が今回，この作品を紹介するに至るには，二つの動機がある。

一つは私的な枠内で起きたことに基づく。ある大学の文学部の学生にラーベの作品を読ませたことがあった。とにかく大変熱心で一年間で一作品を読み上げる予定は見事に裏切られ，二作品を読破。そして，彼女たちはもう一作ラーベをとリクエストした。三作目に選んだのがこの作品である。当然のことながら，一年は瞬く間に終わり，中途で打ち切りとなった。そうするうちに当時の川崎医科大学の学生も小説のようなものを読んでみたいと思いもかけないことをいい始めた。では，というので，出した作品である。これまた当然のことながら，僅かなひ

Correspondence to Kazuko NAGASUE
(e-mail: knagasue@med.kawasaki-m.ac.jp)

とかけらをかじっただけに終わった。いったいどういう小説なのか，皆目，分からなかったであろう。そのことの悔いが残る。当時の学生が覚えていて，この投稿の全訳を読んでくれるかどうか，何の保証もない。しかし，いつの日か，彼らのうちの誰かが，目を留めないとは限らない。その日のために用意をしておこう。教師とは，常に「種蒔く人」である。「誰か」が店頭で見つけた本とは違う何か特別な想い・我が身への親近感を覚え，この作品の主人公と同じように遠い声を聞くとすれば，彼の人生のためにも「幸い」というべきではなかろうか。

さて，もうひとつの理由は主人公が医師であるという卑近な理由である。おもねるつもりも，説教を垂れようという気持ちもない。近頃，ドイツの高校の歴史教科書を訳す仕事を頼まれた。私は当然ラーベが生きた時代を選択して訳させてもらった。訳すうちに作者ラーベが私の中で動き出した事もあるが，それよりも何よりも教科書作りが日本のそれとあまりに違うことへの一種怒りに似た反省とも何とも説明の付かないものがあった。近代国家を誕生させようと陣痛し，ヨーロッパが王侯の領土拡張主義から離れ，今や市民が市民意識と国家意識に目覚め，最初は覚束ない足取りで始めたワイマール共和国が未熟さゆえに，旧体制に逆戻りし，やがてヒトラーが誕生する。ビスマルクの退却とともに始まったフランス包囲網の消滅と第一次世界大戦。そして先に述べた高邁な建国の理想に燃えたワイマール憲法が民主政治体制から独裁政治へ転換して行く過程，即ち，精神の憲法が行政手法としての法律に裏切られ，自由な法治国家が蹂躙され，自縄自縛の恐怖政治へと転換していく過程が，半ば，冗談から始まったかのように見える経過のなかで，いつしか深刻化していき，人々には結果を見るまで分からずじまいであったという歴史が教科書に記載されている。歴史のダイナミズムの恐さを学習者はすべてパノラマとして目前に見る。ドイツ人は何かにつけて Argument という。それは一般に先天的に潜在するドイツ人特有の民族性と捉えられるが，そうだろうかと筆者は疑問を発する。高校の歴史教科書を翻訳するという念入りな読書行為を通じて，徹底した市民社会構成員を育成するという目的を持った入念な教育が，営々として築き上げた思考形式であるとの答えに逢着する。いまや，民族性あるいは国民性と見紛うほどに彼らが歴史から学び取った，いや，学び取らせようとした行為の結果である。自由で民主的な国家を建設すること，これがいわば反吐が出るほどに，執拗に低音部を一貫して支えている。ドキュメントでこつこつと築く彼らのわが祖国の歴史，その情熱はすさまじい。彼らは高校生相手に堂々と虚虚実実の政党の政権争いをあらわにするのである。奇麗事でない歴史を彼らは学ぶ。これがドイツの歴史教科書，歴史教育なのである。人間は良くも悪しくも学習する生き物なのである。

第一次世界大戦は戦勝国もまた失う戦争であった。即ち，ヨーロッパの覇権主義の戦争目的は旧来の王侯貴族の時代感覚の延長上にあり，領土分割であった。しかし，USA 大統領は民族自決を提唱し，植民地の解放を現実として眼前に見えるものとした。更に，ソヴィエトがヨーロッパ保守主義の目からすると史上初のプロレタリアートが支配するとんでもない国家を創設して見せた。当時のヨーロッパの感覚からすれば，驚天動地，途方もない強大な国の誕生である。そこでそれへの防御の壁としてドイツを国家として存続させることに戦勝国側は決議を導

く。こうして内外の事情から自由で民主的な国家ワイマール共和国は生まれ，そして潰えたが，一旦始まったことには終わりはない。個人の自由と基本的人権のもと，犯すべからざる個人が，臣民ではもはやない市民が前方を歩き始めた。

話は当の作品を離れて，やや時代は現代へと向かうのであるが，しかし，根底において微塵も離れていないことをお気づきになられることであろう。話の進行具合から一旦そうならざるを得ぬのだが，近代ヨーロッパが市民意識・リベラリズムに目覚めながら，結局，領土拡張を目指す戦争へと突き進み，つまりは資本主義であれ，共産主義であれ，畢意富は「武力」に姿を変え，世界を覆うこととなった。その経過の裡に，1945年を60年経た今日，民族の問題，文化・思想・宗教の問題と近代が出発点で放置した問題が焦点となってきたことにご注目頂きたい。第二次大戦が終わった直後，ユダヤ人という特定の民族をこの地球上から抹殺しようとする目的を持った戦争を我々は人類史上特異なこととして捉えた。しかし，今日，先行する現実に鞭打たれるようにして，思想界が急ぎ整理を迫られていることは，まさにこのリベラリズム・人権の問題である。どうであろうか，ヒトラーが人類に対して犯した暴挙は果たしてヒトラー個人のみが犯しえた妄挙であって，私たちは罪なき人類として歴史の楽園に住んでいるのであろうか。現在，リベラリズムの再定義が進む中で，ようやくにしてその焦点は財産権や経済的自由の擁護に終わるのではなく，信仰・思想・表現の自由といった精神的自由の擁護に向けられねばならぬことに移ってきた。

さて，1863年，日本では明治維新もいまだしの頃に，近代市民社会の時代の胎動を感じながら，ラーベはユダヤ人墓地を舞台にこの作品を書いた。彼は国が大ドイツ方式か小ドイツ方式か，統一の形態をめぐって，二分したとき，彼は大ドイツ主義を支持した。やがてドイツ人同士の争闘の過程で同時代人としての苦悩を相応に負い，故郷へと引きこもる。旧来の時代が反対者に課す被抑圧者の像はユダヤ人の姿に仮託され，同時に非ユダヤ人であるドイツ人（ここでは回想する主人公の医師）は抑圧者の像ででもある。このヨーロッパという二重性をこの小説に読んでいただきたい。そうすればラーベのアンビヴァレンツな内なる状況が見えてくる。そうして作品は単なる医師の回想を超えてしまう。私たちは当時の時代に芽吹き，政治を操縦する者たちの手元で煽動材料として膨張して行く反セミティズム運動を重ねなければならない。歴史は分厚いのである。ここまで語れば，もう誰しもナチズムと次なる大戦へとうねりを強引に運ぶ得体の知れない歴史力学，そして歴史を回す狂言師ヒトラーの構図が見えてくるはずである。私たちは，この作品が決してやせ細った淡い恋愛小説ではないということに思いを馳せながら，卑近な動機の「医師」というモティーフから浮上し，歴史を汲み取り，そしてドイツの歴史教科書に触発されて生じた疑問，日本の歴史教育は何を根幹に据えているのであろうかという点にもう一度立ち戻って読んで下さることを切望する。医師といえども，一市民，一国民である。少し意識的に眺めてみれば，歴史を築く主体とは誰かと，問い返してみることへのささやかな動機ともなればと希う。

文の端々に，歴史の片鱗を読み取ることは恐らく困難であろうことは予測する。が，それで

もこれだけの用意だけはしておきたい。

翻訳はブラウンシュヴァイク版「ヴィルヘルム・ラーベ全集」第9巻第1部所収による。

HOLUNDERBLÜTE Eine Erinnerung aus dem „Hause des Lebens“ In: Wilhelm Raabe SÄMTLICHE WERKE Braunschweiger Ausgabe Band 9/1 Vandenhoeck & Ruprecht/1974/Gottingen S. 85-119

2004年9月22日

＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊

「リラの花ー遠き訪ないー」

私は医者である。ひとりの老開業医であり，医務参事官の要職も兼ねる身です。四年前，私は第三等赤鷲勲章を佩しました。もう数年もすれば，私はこの世紀をほぼ踏破したということになりましょう。聖書のいう天命，人生七〇年の歳月に達しようとしているのです。私は結婚し，ずいぶんの年月が過ぎました。子供たちは順調に成長し，息子たちは私の家業を継ぎ，娘たちはよき伴侶を得ました。私の心臓と神経に不服を言い立てねばならぬ必要などまったくありません。この二つときたら，実に強靭な素材からできており，余人ならば疾うの昔に自分の感情に負けてしまったような場合でさえ，よく持ちこたえてきたものです。我々医者は外面的にも内面的にもいわば鞣革のように鍛錬されているのです。しかし，だからといって，我々が伝染病毒にいかに平静であろうと，大声で苦しみの声をあげる者，あるいは押し黙って絶望しきっている者の只中にあるとき，一身をささげ，辛抱強く冷静な慰め手であることの支障となるべき理由は何一つないのです。人ならばだれしも自分の責務を果たすべきである。そしてこの私とて，私のそれを全力を尽くして行おうと思い，ねがっているのです。患者名簿録のなかに十字の印を，あるいはそうした類の記号を記入しさえすれば，自分の義務から解放されたと信じるような医師は不都合な医師です。いやそれどころか，我々の最も重い課題は，その時，初めてはじまるということさえしばしばなのです。もてる技術と知識が無力であることを示される我々は，なおそのうえに，患者の親戚や友人たちから，最高に好意あるとも，また最高に正当ともいえるわけではないまなざしを往々にして向けられるのです。しかし，そのときでさえ，こうした友人や親戚の者たちに対し，なお慰めとなる言葉を常に持ち合わせていなければならない存在なのです。家から柩が運び出されてのち，遺された人々に捧げなければならない訪問のときは，見込みのない病人の臥所の傍らで過ごすときより以上に，もっと苦しいものなのです。

ともあれ，そうしたことは今こうして向き合う手記とはそもそも何の関係もないのです。私は，ひとの魂とはどんな不思議を秘めたものであるか，ひとつの例に載せてただちょっとお示ししようと思っているのです。このささやかな本の表紙に「リラの花」と私はかきましたが，それには全く根拠のないところではないのです。やがて読者の皆さんは草木分類名をシリンガ・ヴルガリスと名乗るこのものが，私にどんな影響を及ぼしたのか，お知りになることであ

りましょう。

それは一月の晴れた寒い日のことでした。太陽は空に輝いていました。雪は散策する人の足元できしんでいました。馬車の車輪は口笛を鳴らすよに，空気を切り，賑やかな騒音を立てて回転していました。健康的で，心の底まですがすがしい気持ちにさせる日のことでした。私は午後の三時，市の一等地にある堂々とした家並みの続く界隈の，中でもひときわ立派な邸宅の前で，呼び鈴をひこうとしていました。その前にもう一度大きく呼吸をしようと息をすっかり吐き出したところです。

この堂々とした押し出しのよい家の内部へ，できる限りの生の新鮮な息吹を持ち込もうと切望していたときならば，いったいなにをすべきか，よく心得ていました。しかし，いま，ここにはもはや重病人もいなければ，もちろん遺体だってないのです。私はこの家で処方箋を書く必要もなければ，メスを振るう必要ももはやないのです。

私はドアの前で長く待つ必要はありませんでした。憂いに満ちた表情の老召使が私のためにドアを開き，黙ってお辞儀をしました。私は冷たく，広いホールを通って大きな階段をのぼって行った。―― ゆっくり，ゆっくりと，一段，また一段。

私はこのところ頻繁にこの階段をのぼったものだった。―― 昼日中の何どきであろうと，また夜中のどんなときであれ。手摺りの隅の柱の上に，一体の瞑想に耽るミューズの鋳造の像が立っていた。優美なヴェールに身を包み，顎に軽く指を触れ，頬杖を付いていた。大都市の全体が眠りに就いた夜中，老召使の深い闇の中で掲げる案内のランプはこの白い像に光を投げかけた。私は，その傍らを通り抜けながら，この像にまなざしを注いでは，何かしらこの像のもつ崇高な永遠の安らぎを，幾度となくこのドアの向こうの世界へ持ち込もうとした。だが，それも済んだことだ。やがて悪性の熱が勝利をおさめ，白い繻子の枕に頭を埋めた乙女の柩はこの階段を下り，この像のすぐ傍を通り過ぎて行ったのだ。柩は広間を横切り，市の通を抜けて行った。―― 雪が墓を覆い，それから二十日間がその上を過ぎた。そして今，漸く凍てつく冬の太陽がその上を照らしていた。

私は調度の気持ちよく整えられた部屋の間を通り抜けていった。各部屋部屋には美しい額縁入りの絵がさまざまに彩りを添え，窓台の上には花々が咲き競い，床には柔らかな絨毯が敷き詰められていた。しかし，これらの空間はすべて寒々とし，一人として人影はなかった。

私は次々とドアを開いては，静かに閉めて進んだ。そうして私はこの屋敷のこの翼にある最後の部屋へ通じるドアの前に立った。それは私にはすっかり馴染みになった隅の部屋へと通じるドアだった。そこで私はちょっと耳を澄まし，中に人の気配はあるまいかとうかがってみた。

内側で私を待つものがなにであるのか，私は十分承知していました。しかし，それでもなお何ものかが私の全身を微かに這い登っていった。冷たく，湿った何ものかが私の額をそっと撫で，戦慄は本当にかすかでありながら，皮膚の全神経の末端まで走り抜けていったのです。鞣しあげられた医師でさえ，まだまだ十分鞣しきれてはいなかったのです。私は今日それを再び味わうことになった。

私が足を踏みいれたそこは，明るく，暖かく，心地よい部屋でした。大きなガラス窓越しに太陽はまだここを照り遺していた。窓辺にはまだたくさんの高価な花々が咲き競い，番の小鳥の遊ぶ瀟洒な鳥かごがそれらの真ん中に置かれていた。開かれたピアノが，開いたままのリート集を載せ，美しい刺繍飾りの椅子の前に，今もいつものように立っていた。あたりを囲むもの一切が，ここが女性の，しかもうら若い娘の部屋であること，いや，部屋だったということを告げていた。すべてがどこか乙女らしい香を宿していた。既婚の女性や老嬢の住まいではとてもこうした飾りつけにはならないものだ。

私が黙ったまま挨拶をしたのは，喪服に身を包み，蒼褪めた顔をした夫人であった。涙の涸れた，ああ，ほんとに涙の涸れ果てた悲痛な目をして，引き出されたままの抽斗を前に，絨毯に跪いた姿勢で私を見上げた。夫人は毎日，時が一分刻めば一分，その各分ごとに，死のような悲しみにこの芳香と光の中で酔いしれ，憑かれたように過ごしていたのだった。―― ここにかつて存在し，二度と還り来ぬひとの芳香と光に包まれながら。

私たちは最初の挨拶の言葉が済めば，もはやそれ以上言葉を交わす必要はなかった。しかし，悲しみに沈む母親はそれでもなおいつも通りに言葉を続けた。「ああ，御親切なお方。私はあなたがお越しくださいましたこと，ほんとに感謝しております。」言葉を受けながら，私はピアノの前の刺繍の椅子に腰を下ろし，手で額を支え，うつむいた母親に視線を注いだ。

彼女は，この世の短い滞在を終えた娘が置き去りにした小さな宝物のくさぐさにひたすら秩序を与える作業に浸っていた。悲しみに湛えつつ行くもののみが発作的にすがりつき，ひしと両手に抱きしめるこの記憶の杯の苦きから，彼女は来る日も来る日も飲み，そして飲み干したのだった。

女友達の手紙，楽しい祝祭の日のプレゼント，可愛い装飾品，それらはみなこの世で特別優遇を受けた子たちのために技の粋を尽くして作りなした目も彩な尽きることなき，さまざまな品々ばかりであった。それらに彼女はいま秩序を与えねばならなかった。彼女の手が触れるものすべては，この悲しみの母によってまるで命あるものの如く，魂あるものの如く扱われた。彼女は愛撫してはそれと語らい，死者を喜ばせようとてか，はたまた，いや多分かわいい些細な悩みを与えんがために，それがこの家にやってきたあのときのことを思い起こさせては，自らまた思い起こしているのだった。

あそこにはこわれた陶製の羊飼いの乙女の像があり，それにはそれの長い話があるのだった。母親はひとりごちた。私に向かい，そして金色に彩色した像に向かって，この話の一部始終をくまなく，それが舐めた有為転変のひとつひとつを細大もらさず語り聞かせた。私はそのとき不用意に傍のピアノのキーに触れた。と，そのときいたわりを受くべき当の語り手の面に一条の嫉妬が突き抜けた。死者のものの楽音を他人の手がいま新たに目覚めさせてもよいものだろうか。

青褪めた顔が再びうつむいたとき，わたしの視線は開いた楽譜の上に落ちた。運命の非情の歌だった。偶然がそうしたのだろうか，それとも死者の予感に満ちた手がそこを開いたのだろ

うか？こういう歌だ。

運命がお前の手に幸運を置くとき，
改めてお前は別のひとつを捨てねばならぬ。
そうして利子のように，お前は苦しみをひとかけらづつ得るのです。
やがてお前は激しく恋焦がれていたものをひどく憎むことになるでしょう。

ひとの手はまるで子どもの手のよう，
ただむやみに掴んでは，無思慮に壊してしまうでしょ。
壊れた破片をその手は撒き散らし，この世をば埋め尽すことだろう。
たとえその手が握り締めていようとて，決してその手のものではありはせぬ。

ひとの手はまるで子どもの手のよう，
心はせがんで止まぬ子どもの心。
さあ，手をお伸ばし，掴むがよい！…そこには色とりどりの金ぴかものが。
いま笑ったその顔で，こんどは嘆き訴えねばならぬのだ。

運命がお前の手に栄冠を授ければ，
その見事この上なき栄光をお前自ら毟り取るにちがいない。
お前はお前のその手で，人生の輝きを粉々にしてしまうだろう。
そして，砕け散った破片の上に涙することになるでしょう。

この歌の文句が，遥かかなたに過ぎ去った青春の時代からわたしに押し寄せてくる最初の警告であったのです。しかし，それには第二の警告が続かねばならなかった。そうして初めてこの紙片に向かって打ち明けようとする一連の記憶と人影が浮かび上がってくるのだ。

窓外の空は冷たく青く澄んで，向かい側の家々の屋根の上に高く広がっていた。相変わらず太陽は高窓から差し込んでいた。しかし，午後の光に僅かに溶けた氷柱は早くも再び凍り始めていた。わたしは裁縫台から造花のパーティー用花冠を取り上げた。と，そのとき太陽がこの冠を明るく照らし出した。

それは白と空色のリラの花と葉が優美に編みこまれた，手の込んだ冠だった。だが，そこには亡くなった乙女の長い，細い金髪が一筋，絡んでいた。あの悪性の熱がその日からずっと続くことになった最後のパーティーが果てた夜，冠を外すときに絡まったものだ。

この世には種々の栄冠があり，世界はさまざまにそれを切望し止まない。あるときは勝ち取り，あるときは逃す。生き方はどうであれ，生きることそれ自体，ある栄冠を勝ち取ろうとする試みではなかろうか。だれもが己がじし全力を尽くして，あらゆる可能性を傾け，その作業

にとりかかる。その過程で幸福であることもあれば，不幸と思うこともある。ときには非常にすばらしい。しかし，またときには非常に憎むべき結果が明白となるのだが。相当数の栄冠は未完のまゝにうち砕かれ，またあるどこかの人の子の高く擡げた頭上に長い間載っていた誇らしい冠も，いつかは遂に見知らぬひとの手に落ちゆき，その手はそれを握り占め，葉の一枚一枚を調査し毟り取る。だが，只今は，冬の冷たく醒めた太陽が，すべてのまやかしと，包み隠すぼやけた微光を忌み嫌いながら，その上を明るく照らす。

そう，もちろんそれはいま私がこうして手にもつこの白と青の花が編みこまれた冠とは違う。それも同じリラの花から作られていながら，別のものであるのです。確かにそれもひとの手が巧みに完成したものに外なりませんが，しかし，それにも関わらず，それはあまりに新鮮な生命から作られていたのです。ですから人生のかなたへと拉致されながらこの老人は，頭上には年年歳歳雪は降り積もり，いよいよ白く染まりゆく髪のこの老人は，ますます遠ざかり行く人生の遥か昔へと，そしていよいよ深く青みを増し行きながら，遠き過去へと誘われるのです。若くして去って逝った娘の目の前の飾り物とは根本的に関係などありようもない記憶が，いま忽然と目覚めた。

私が深く，辛くさえある真摯な気持ちで花冠に向かうのは，このリラの花のせいなのです。私の人生を取り巻いて，部分的には私自身の手によって編まれた花冠が存在した。その両端がいまこうしてかくも速やかにふれあい，そしてどうやら完結に至ったようである。

ピアノの上に開かれたまま置き去りにされた歌は，あの若くして死んだ娘よりもはるかに私のためのものだった。乙女はこの地上での短くそして幸福な呼吸を終えて，穏やかに，平静になんの苦痛もなく眠りに落ちていった。美しい春の花で編み上げたこの花冠を，もっと美しく小さい頭にいただいた娘とはいったいどの子のことか。彼女の生と花冠が紡ぐ愛らしきシンボル。——

かつて私はこの世に投げ出され，みなし児として，とるに足らぬ財産の相続人として，ある陰鬱なヒポコンデリーの親類の家で暮らした。そしてもっとも明るい真っ昼間でさえ病的な墓場のような考えを持ち込んでくるこの男は，毎日の日課，つまり絶え間ない勉学で，わたしを強固な鎖に繋ぎとめた。私は膨れ面をして，不承不承，彼のうすぐらい部屋に座り，彼の不機嫌で目ざとい監視の目の下で少年期を過ごした。——そうでなければ人生で一番幸せであるはずの時期を——苦しみに満ち，貧弱であることにかけてはたっぷりと申し分なく過ごした。何のわずらいもない仲間たちの輪の中の腕白な楽しみや，馬鹿げた空騒ぎを私はついぞ知らなかった。他愛もない少年のいたずらをしてしたたかに殴られ，叱られる経験も一度だってなかった。盛りだくさんの文法の「御馳走」などでは，到底埋められっこない豊かな祝福がそのために私から遠ざけられていった事実が，ひとかどの学識豊かな紳士であること以上に人一倍はっきりと私の本性に刻み付けられているのです。

本のなかには陽気な人生やまた真摯で華やかな人生が確かにありはしました。が，当の私はこれらの本に覆いかぶさるだけの日々を過ごさねばならなかったのです。明朗この上なく，且

つ卓越した神々も女神たちも，ただ気難しい苦しみを与えるものとして私の前に現れただけだった。英雄も賢者も，私にはただただ，なんの動機もない怒りに，私の内部に哀れにも閉じ込められた悪魔の起爆装置に点火させんがために挑みかかり，またそれがためにこそ彼らの知恵を発揮しているかのように思われたのだった。彼らはひたすら二・三千年後にやってくるはずのこの私のために，全く嫌悪を起こさせる単語の身の毛もよだつような迷宮を延々と引きずり回しては付け狙い，そうした挙句に鋭角的な構造の暗い奈落へ突き落とすためにのみ命を保ち，仕事をし続けているかのように思われたのでした。

遂にこの七年間の苦しい年季奉公が明けたとき，もちろん私は突然獣のように鎖を断ち切って自由になった。やがてこうした教育のもつ太古の尻尾が，しかしながら決して丸め込まれきってはいなかったしぶとさが結果を現し始めた。私は大学で血気盛んな，規範を喪失した連中の仲間に入った。そして私の名声は品行の芳しくない仲間連中における大きさに比べ，私の教授たちの品位あるお集まりの間の小ささははるかに勝っていた。私は当然，私の後見人の伯父の支配下を脱し，できるかぎり遠くへ先ずウイーンへと逃避した。とにかくここで私のアカデミックな人生行路は始まった。当時はまだ古き，陽気な都ウイーンの名残が満ちていた。だが，やがてかの地で私の足元の地面は熱くなりすぎ，私の行状が多くの衆目を引くようになったとき，プラハへと逃れた。そこの医学講義は当時，非常に高名であった。——

太陽はあいかわらず私の手の中のパーティー用花冠の周囲できらきらと躍っていた。白色と赤みを帯びた花々の間にあの美しい所有者が置き去りにした一筋の髪が黄金の糸のように輝いていた；——古い百年の塔の立ち並ぶ都プラハのことが，そしてもうひとりの美しい娘のことが蘇ってきた。しかし，この娘のほうは黒髪なのだ。そう，それに続いてもうひとつのリラの花のことが浮かびあがってくるのだ。ああ，プラハよ。汝，調子っぱずれの，お祭り騒ぎの都よ。汝，殉教者たちの，音楽家たちのそして美しい娘たちの都よ。ああ，プラハよ，お前は私からわたしの自由な魂のどの部分を奪おうというのか！

彼らは言う，チェコ人の母親は子を産むと，その子を屋根の上に置いてみる。もしもその子がしっかりと掴まっていたならば，その子は泥棒になるだろう。もしも転がり落ちたなら，その子は音楽家になるだろう。もしもこの諺がドイツ人の頭から飛び出してきたのなら，ボヘミヤ人のブーイングを受けることだろう。だが，汎スラブ人の口承なのだ。それはそれとしてあるがままに受け留めねばならぬ。そうして，私が医学を学んでいたその当時，この古きよき，愉快な都市プラハにはこんな子もいた。——その子はあるボヘミアのユダヤ系母親から生まれた。——なんとその子は屋根から転がり落ちたのではなく，まさしくしっかりと掴まっていたのです。すると権利としてその子は盗みをはたらいてもよいし，また，そうしなければならなかった。その子は私から心を盗みました。ところが盗んだものの私はその子を愛してはいなかったのです。そうして，ある悲しい物語が生まれたのです。

町に不案内な人間にとって，当時，ユダヤ人の墓地をみつけることは今日よりもはるかに困難なことでした。そうした場合，道順を人に尋ねるか，あるいは連れていってもらうかするの

は普通のことでしたので，私もそれに倣った。到着後のある日のことだった。私は大リング通りを逸れてガイスト通りへ入り，やがて名もない路地や狭い小路のごったがえす雑踏のなかへ紛れ込んで迷ってしまった。そうなったあとで，私は遂に「墓地」への道を問うことになってしまった。

見知らぬ人々の間で当惑しきったときには，最も好ましい顔をした人物に頼ってみるというのが，私の原則だったので，私はこのときもまたその顔を求めてあたりを見回した。しかし，ある当惑が他の当惑へと変わっただけであった。私に出会う人々はまるで夜のように例外なく不快だったのです。もしも私が観相学に興味を持っていたとするならば，とっくに私はその解答を得てしまっていたことになるでしょう。が，しかし，結局，私は目指していたものをみつけた。

とある家の扉の前の暗がりに一着の女性用の古着がかかっていた。そのポーチの柱に物憂げに，しかし，可憐な感じのしないわけでもない十五歳くらいの少女が凭れていた。彼女は両腕と両手を背なで組んで隠し，私を見つめていた。私は彼女をもう一度見つめなおし，私の問いを持ち出す決心をした。とはいえ，上流階級出自の顔を私は目の前に見たわけではなかった。私に答えが与えられるよりも何よりも前に，背後から小さな褐色の手が突き出された。私に向かってその手はまごうかたなき請求をあらわに広げられてさしだされたのだった。そして私は――六クロイツをその手におさめざるを得なかった。

「私たちの古い墓地のこと？じゃ。私がご主人様を連れてってあげるわ。」

そのやせっぽちの姿態は，三段の穢い階段を跳ねおり，あっという間に私の目の前にするりとやってきた。そして道をあちこち折れながら，穢い曲がり角，大小の路地，それらを通り抜け私を案内した。しかるべき場所という場所，とにかく至る所で，私の黒の古風なドイツ仕立てのビロードの上着に程度の差こそあれ，有利な商談が持ちかけられた。私はこんな申し出を断るために立ち止まったりせず，ただひたすら，この珍しい界隈を案内し，遂には私のドジに呆れておどけて嘲笑う私の先達のあのかわいらしい幻惑者にのみ注意を集中させた。

我々はある狭い袋小路へ入っていった。といきなり，右手に二つの背の高い石壁に挟まれた，行き詰まりには不気味な弓形をした扉が立つ場所に出た。それはなんともいえぬ暗い通路へと通じていた。この門柱の傍らに私の敏捷な案内人は立ち止まった。彼女は暗闇を指差してみせ，そしてこの上なくたくらみのない声で言った。

「あそこを叩いてごらんよ。」

私はそもそも自分がどこを叩く羽目になったのか全く分かっていなかったけれど，運を天に任せ通路を手探りで進んだ。そして黒い色の，湿った扉に突き当たった。私はノックし，そして内側のうめき声とうなり声を聞いた。そうしてずるずるとひきずるような鈍い物音を耳にした。それから玄関が開き，私はひとりの胸がむかつくような老魔女と向き合うことになった。そのものは私にチェコ語で金切り声をきしませながらなにやら話しかけたのだった。なおその後からも，三人のどれもよく似た魔女が撞木杖を突きつつ，ゆっくりとこちらへ這い寄ってき

た。そして同じくなにやら分からないものが，私に向かってごうというような低いうなり音を立てて迫ってきた。極度に仰天して，私は私の身の回りの半闇の，下方に広がる空間を見つめた。そこには六台の寝台があり，そのうちの二つのベッドから二人の身の毛もよだつような幽鬼が上半身を起こして私のほうを見ていた。それはあのガリヴァーが旅行の途路出会った悲惨な生き物たち，額に黒い痣をつけて生まれ落ち，それでいながら決して死ぬことの出来ぬ生き物たちのように，大きな目を開けて私を凝視していた。私に確かにある予感が，この質問がこの場では殊に禁句ではないかという予感があるにはあったのだが，ユダヤ人の墓地は何処ですかという問いを繰り返す無作法をしてしまった。そして予感的中 —— 次の瞬間，私は先に語った暗い通路にいた。そして健康な抉り出されずにすんだ眼をして，逃れ出たことを喜んでいたのだった。地獄のようなわめき声が背後の闇の中で響き渡っていた。あの悪戯者，私の幻惑の道案内人，私の素敵にかわいいユダヤ人の子は私の六枚の銅貨の代価に，ベト・ハイム（ユダヤ人の古墓地）の鍵を管理する尊敬すべきイスラエル人の所へではなく，私を六人の老いたキリスト教徒の女たちの養老院へと案内したのだ。

と，突如，明るい笑い声が怒りに凝固した私の意識を目覚めさせた。T字形に交わったかなたの横丁のほうには太陽が明るく輝いていた。そして暗い路地の末端のそのまぶしい陽光の中で，またもひとりの魔女が躍っていた。しかし，この魔女は若く魅惑的だった。そして，囃し立てた。

「こんなに若い魔女で，こんなかわいい魔女より愛らしい魔女ってこの世に居やしない。」

太陽の明るい光の中で踊り，私の間抜け面を馬鹿にした。私はこぶしを振り上げて脅した。「待て。この魔女の悪魔め。小さなプラハの悪魔小僧！」

しかし，彼女は指を唇に押し当てて，皮肉っぽく叫んだ。

「ストルク　プルスト　スクルツ　クルク！」

そのメロディと豊富な母音で際立つ野暮なドイツ語で推察してみると，それは凡そこういう意味だった。「指を喉の中に突っ込みな！（お黙り！）」それからその妖精はふっつりと姿を消した。私のほうは勝手にこのことばの深い意味をじっくり考えてみたい気持ちになった。しかし，そうはせず，またこのひどい経験に懲りて，もはや誰かにユダヤ人墓地への道を尋ねることもせず，ゲルマン人の辛抱強さでそれを自分で探し始めた。私は私自身の星，運勢を信じていた。そしてその星たちも私を見殺しにはしなかった。遂に，この私を，人間の幻想が思い浮かべ得る限りの最も汚いラビリュントスを通り抜け，あのぞっとさせる，たびたび記述に登った千年の埃がうずたかく積もった領域へと通ずる入り口まで運んでいったのだった。

私は無数の，互いに折り重なっては山をなす石の板と古い太古のリラの木をみた。それは傍若無人にごつごつとこぶだらけの大枝をそこら中にうねらせ這わせ，覆い尽くしていた。私はせまい通路を歩きまわり，レヴィの水差しを見つけ，アーロンの手をそしてイスラエルの葡萄をみた。私は他の人と同様，私の敬意の証として小石を高師ラビ・イエフダ・レーヴ・バール・ベツァーレルの墓のうえにおいた。それから私は十四世紀の昔からある黒い石の墓標の上に腰

を下ろした。すると，その場のぞっとする気配が周囲に満ち，私を襲った。

一千年，彼らは神の民の死者たちをここに集めて押し込んできたのだ。ちょうど彼らが生者をゲットーの狭い壁の中に封じ込めたように。太陽は機嫌よく照っていた。時は春。すがすがしい風の息吹がリラの小枝や花を揺すり，墓上で葉擦れの音はさやさやと楽を奏で，甘い芳醇な香りを孕んでいた。しかし，私はだんだん息苦しくなっていった。なんということだ，彼らはここの場所を Beth-Chaim［ベト・ハイム］，生命の家と名づけているのだ。

どれほど多くの生きとし生ける者たちの悪意が彼らを踏みにじり，虐待し，蔑すみ，不安に打ちのめしてきたであろうか。それら幾世代もの人々をこの大地は飽かず飲み込み続けてきたのだ。目の前の黒い，湿った，腐った大地から朽ちた息吹きが，あの未埋葬の戦さの庭からたちのぼるよりも，はるかに強烈に，窒息させてしまわんばかりの不気味な霊気を孕んで，立ち上ってきた。この地面で，命の上に命がまるで底なしの貪喰な沼に吸い込まれるように，次から次へと深く沈んでいったのだ。そして不気味な霊気が，ついには太陽の輝きのすべてと春の息吹と芳しい花の香りのすべてを打ち消してしまったのだった。

人生のこの時期，私がどんなに愚かで放恣な若者であったかということは既にお話しました。しかし，この場所で私を襲った感情は，私がまだまじめになり得るという保証を含むものであった。

ますます私の頭は深く深く垂れていった。突然，その私の頭上，しかもすぐ身近かで，明るい子どもの笑い声が響き渡った。私が一度聞いたことのある，あの声でした。今度も，私を仰天させてしまった。私が慌てて上を見上げたとき，私はかわいらしいあの姿を眼にしたのです。

先ほども話したように墓地全体をリラの茂みが覆っていました。その下方の茂みの咲きこぼれる花の真ン真ン中の一本の奇妙な，こぶだらけの大枝の上に，春の誇らしさと力を緑の葉と花で豊かに飾りたてながら伸びる大枝の上に，いましがたの，ここへの道をずいぶんと手の込んだひどい教え方をした，からかい好きなあの子が腰掛けていた。そしていたずらっぽくドイツ人の学生を見下ろして，笑っているのです。

しかし，私が手をこの亡霊のほうに伸ばしたとたん，それはぱっとすばやく消えてしまった。そして一瞬後には，笑いこけている黒い巻き毛の髪に縁取られた褐色の顔が私を改めて誘い込もうとするかのように，ラビの墓の陰に現れたのだ。確かにその手に乗って，今にも年経た古い死者達の眠る場所を舞台に鬼ごっこが始まりそうになった。だが，しかし，今度ばかりは唆されはしなかった。というのも私には，たとえ私がその子をとっ捕まえようと飛び掛ったにせよ，それは何にもなりはしないということがよく分かっていた。この大地に，この黒々とした地底にその子は消えてしまうか，あるいはそれよりもきっと墓を覆っているリラの花の中へ消えてしまうかするにちがいないのだ。私はまるで根が生えたようにじっと立っていた。そして明るい昼下がり，太陽がきらきら輝く明るい午後のひと時にありながら，私はそうした陽の世界に対し露ほどの信頼も置いていなかったのだ。誰がいったいこんな怪しげな場所では，他の場所にはない異なる幽鬼の原理がはたらかないなんて断言できるだろうか。

私はじっと立っていた。恐らく動くことを極度に恐れていたに違いない。そして今ようやく唆そうと笑い声をたてたり，目配せしたり，おいでおいでをしたりしたところで彼には何の効き目もないことを，このお馬鹿さんは悟った。と，その子は他の方法で魔法をかけ始めた。その顔はまじめになり，小さな頭はうつむき，はにかんだように傍に擦り寄ってきた。そしてもう一度慎み深くお辞儀をして，私の前に立ち，言った。「ご主人さま，お許しください，もう二度と悪い子ではいませんから。」

その子は私がその子の手をとるのをじっとがまんした。そして私がその子の目をもっとよく覗きこめるようにと引き寄せたときも，抗いはしなかった。その子は不思議な，この世のものとは思えぬ仕方で，明晰で分別のある返事を，何処から来て，なんと言う名なのかを尋ねたとき，返してきた。その子が妖精流に嘘をついたのでなければ，この野放図で腕白な，だがひどく蠱惑的な生き物は精霊の世界の一員ではなく，即ち，オベロンやティターニアスの娘などではなく，プラハのヨーゼフシュタットで古着や器具・雑貨を商うきわめてこの世的な両親の若枝であるということになる。家の所番地や名前も分かった。それはウズの国の立派な男ヨブの娘と同じイエミマといった。イエミマというのはドイツ語で Tag（昼）という意味だ。

父親はヨブとは言わず，バルッフ・レーヴをいったが，彼は苦難の時代にあってあの受難者のよき相棒ではなかった。イエミマ・レーヴの母親についてはむしろ完全に黙していたい。

私がユダヤ人街の533番地の家で見たものは，なんという汚辱だったことか。この家の娘と知り合いになって後，初めてやってきたとき，私の時計は抜け目なく質に取られた。確かに私は一枚の真新しい，価値がないわけではない手形をポケットにしたことはしたのだが。そして私が嗅いだものは私が見たもの以上にはるかにひどいものだった。

しかし，魔法はいまやしっかりとこの私の上に座したのだ。しかもそれは強力なお手合いの魔法だった。そしてやがて，更に性質の悪い魔法となる運命にあった。それはそうと，いったいどうして四十年を隔てた今，このベルリンの落ち着きに満ちた清潔な上流社会のお屋敷でその魔法は改めて，若い娘が最後の宵のパーティー用のリラの花冠を私の手に落とすことで，深い眠りから目覚め，解き放たれることになったものか。——

私は陽気なウイーンから，プラハの大学で医学部の誉れたらんと，至ってまじめな，且つ熱心な，怠惰の埋め合わせをせんとする堅い決意を抱いて移ってきたのだ。何にもならなかった。私はかつての野放図な衝動，多くの医学生が惨めにも高貴な治療を自分自身の肉体に向かって実践することになってしまうかも知れないそちら方面への衝動に再び駆り立てられたのではなかった。いや，ご想像とは反対なのだ。—— 夜の浮かれ騒ぎやどんちゃん騒ぎの飲みごとも，またメルニカ・ワインやピルゼン・ビールそして巴旦杏酒ももう既に慣れきって，魅力的でも何でもなくなっていた。が，しかし，それにもかかわらず私はいわば酩酊状態にあった。ハンガリー製のタバコの莫大な量を私は私の支離滅裂な夢の上に浪費したのだった。ネッカーツアルカー横丁にある私の部屋へ，全教官の中へ，解剖台の上へ，そうして私の行く先々の至るところへ，このユダヤ街の小さな魔女イエミマ・レーヴが追っかけてきた。もはや病理学も治療

学も勉強することは不可能だった。人間の屍体はもちろん生きた犬，猫，ウサギはおろか，カエルそうしたものさえ，解剖することが不可能となった。そんな風で私はプラハでもまじめであるということを諦め，そしてその決意を後程という別の機会まで，つまりは他大学に移るまで，どこかへ置き忘れてしまった。

ネッカーツアルカー横丁の私の部屋で濃い空色の，芳香を放つ煙に包み込まれながら，固いソファーの上に横たわっていた。そして極めて深淵な意味に満ちた，だが同時に理性に欠けること夥しい考察を人間の魂の不思議に関して繰り広げていた。現実がこの体たらくでなければ，私は情熱がどのようにして生じ，過ぎ去るのか，この命題を巡って一巻の本をひょっとすると書き上げたかもしれなかった。私はたっぷりと煙を吹きあげ，夢を見切ると，それから脚の生えた夢を継続するために起き上がり，まさにそれ自体が夢と見紛うこの町の横丁という横丁をあてどなくさ迷った。

大リングの表通りでは，娘たちが噴水の縁に腰掛，互いにボヘミア語とドイツ語で交すおしゃべりに耳を満たし，そして夕べともなれば聖母マリアの柱に寄り添い，敬虔な祈祷者たちの歌に耳傾けた。市庁舎の衛所の上では，あの魔法の街灯の光の環の中で色とりどりの人生がかわるがわる現れては消えるように，ハンガリー人の選抜歩兵隊員の一隊がイタリー人のそれと交替した。また別の折には丘陵をなすヴィスセハラートをぶらぶらと歩き回った。そこでは没落した王の宮殿でガチョウ（馬鹿な女）たちが大声で泣き喚き，山羊（うすのろ女）どもが牧草を食み，あるときには法外に破れた洗濯物が干された。また時として幾度となく私は守護神聖ヨハン・フォン・ネポムック像の立つあの有名な橋に凭れ，私の決して死に絶えることのない分別の魂にそうするよい口実を見つけてやることもできないまま，何時間もモルダウ河を見下ろしていた。そうした後は，大抵急傾斜の小路を抜けてフラディシン聖堂の階段を登り，足元の誇り高きボヘミアの都市を胸壁越しに見下ろすのだった。何度となく暑い夏のひとときを私は聖フェイト聖堂のひんやりとした薄暗い堂内で過ごした。しかしイエミマ・レーヴは，私を聖ネポムクの墓所を覆う緋の天蓋の下にいるときでさえどこまでも付き纏った。そこの目前のヴェンツエル礼拝堂には，聖なる大公にして国の守護聖人なる方が裏切り者の兄弟によって打ち殺されようとしたとき，死闘の最中のわが身を支えるために握り締めたというドアーリングがかかっていた。それに畏敬の念をこめて口付けすれば，効験あらたか多くの災禍から護られると言い伝えがあった。

ああ，しかし，このような口付けも私を襲っている今の禍を守護する効力など無いに違いない。もし仮にドアの横の古い木細工の埃をこすりとって額に十字を三度書いてみたところで，それも頭痛薬としては程遠い。―― 実際，時々私は心因性によるのではない，純粋に肉体的な頭痛をあの奇妙な日々，経験したのだった。ああ，私はこのようなあり難い十字印などで決して癒されはしなかった。この苦痛は，ただ大急ぎ，カイザーブルクや聖堂の階段を駆け降り，とって返して聖なるネポムックやその他の彫像の前を通り過ぎ，橋を渡ってヨーゼフシュタットへ走って行けば，そうするとそのときだけは軽くなるのだった。ユダヤ人地区の古いひどい

壁や軒並みの影に入ると，初めて私の額は再び自由にのびのびとしてきた。しかし，もちろんその界隈にいても熱病にかかっていたのには変わりはなかった。

既に私は有名な墓地の門番と親交を結んでいた。もうずいぶん以前からこの死者の王国の入園許可を求めて，お金を支払う必要はなくなっていたのだ。皇帝並びに王を戴く二重帝国の警察当局は門番に好奇心の強い他国ものの旅の金庫や財布から抜き取っても差し支えない入園料の六クロイツを認めていた。

まことに速やかに私はこの半白鬚の老人の好意を勝ち得た。というのもユダヤ民族の価値と歴史についての彼の見解を受け入れ，理解していたからである。そこで私たちは墓の間を歩き回り，多くの伝記や伝承を語り聞いたのだった。―― 確かに最後の審判の場所，ヨザファートの谷で追い散らされて横たわるものたちに酷似するこれらの蒼古とした記念物の間には，これら灰色の墓石の間には実に多くの学ぶことがあった。

そして，イエミマ・レーヴはこの門番の親族だった。彼の孫，曾孫，あるいは彼の兄弟の孫かなにかそうした関係だった。―― 長い年月が私の記憶からその親戚関係を消してしまった。彼女はたびたび私たちの会話に，彼女のこましゃくれた一言を，時には申し分なく卓越した形で差し挟んだ。

この頃のメランコリックな刺激はいかなる方法であれ，とても書き留めることが出来ないほどの日々，時間，一瞬一瞬であった。ああ，この古い，太古の死者の土地，そしてこのリラの木！いまやこの場所の空気はもはや私にとって息苦しいものではなかった。幽鬼どもも太陽の明るさの中へ現れ出ようとはしなかった。太陽の光は繁る木の葉間を射しぬき，墓石の上で踊っていた。私はいよいよこれら灰色の石たちと親しくなっていった。この老人よりもずっとよくイエミマは私にこれらの秘密を明かしてくれた。門番が安楽椅子に寄りかかって眠り込んでいたり，タルムードの測り知れない小難しいことにあまりに深く入り込んで，抜き差しならなくなったとき，彼の邪魔をしないようにそっと気をつけ，手に手をとって私たちはベト・ハイム（ユダヤの古墓地）の中へするりと逃げ込み，私たちだけで前代未聞の好天続きのすばらしい夏の日をたっぷりと味わった。

ああ，このベト・ハイム（ユダヤ人の古墓地）！なんとこの墓地は私にとって間違いなく「生命の家」となったのだ！この若い少女がヘブライ語の墓碑の不思議な象形文字の意味を説明すると，それに招き出されて，いままで一度も考えが及ぶことのなかった深い生命の意味が呪文の誦じる声に誘われて浮かび上がってくるのだった。賢者の，高徳の，敬虔なる男女が，また気高い受難の男女が，美しい少年少女たちが数百年ずっと守り続けたまどろみから目覚めてやってきた。そして彼らの影はきわめて生き生きと生命に満たされていった。すぐに私は彼らと，現代に至るまでなおも多くの尾をひきながら関係を持ち続ける未知の世界の人々と親しく Du で語らいあう仲となり，私自身の民族の伝承や歴史上の人物の存在を信じると同様に彼らの存在を信じたのだった。

いつも私たちは高師ラビ・レーヴの棺型墓の隣に並んで坐った。私の小さな先生はこの一族

の出自であると信じていたし，そのことを誇りともしていた。彼女は私にこの賢者について語り聞かせた。皇帝ルドルフ二世の親交の模様を，殊に，彼に旧約聖書の族長の霊を招び出し，顕現して見せたさまを話して聞かせたのだった。そしてどんなにタルムードやカバラに精通していたかを語った。また，あのユダヤ人たちの僕であるゴーレムを霊界から呼び出したときの様子を，更に，サムエルの娘，美しき真珠を彼の妻として獲得したことを，彼が四百人の弟子を抱え，百四十歳の命を永らえたことを，実にさまざま語って聞かせた。

いっぽう，私のほうはラビの話に聞き入る「三房の隠者の庵」校の四百人の生徒の誰よりも，この小さな語り部のすべてを信じ，この口元に一言も洩らさじと注意を傾けたのだった。

我々は愛について語ることはなかった。私もまたこの少女を全く愛しているのではなかった。しかし，この少女に対して私の心に生じた感情に名称を見つけよといわれると，それは不可能であった。そしていまなお不可能である。感情はくるくると変わった。まるで娘子の気分そのもののように，四月の空のように，プラハの町やベト・ハイム（ユダヤ人の古墓地）のリラの茂みの上にかかる薄い夏雲のように変化した。あるときはイエミマが，高師イエフダ・レーヴの長男のハジムの直系の子孫である彼女が，穢いちびの，意地悪なだけの生き物のように見えたのだ。この生き物ときたら，嘲笑した罰にたっぷりと15分間というものさんざん独相撲をとらせた。彼女はあの人間たちを苦しめる大いなる力で武装した妖精のように，しかも悪用しようとする最高の意志で武装した妖精のように見えたのだった。すると今度は一転して，彼女はもう一度哀れで，美しい，世にもかわいらしい，メランコリックな人間の子に戻っていた。その子の身代わりなら吾が心臓の血さえ注いだとて惜しくない，その子の身代わりに命をさえ投げ出してやりたいと思う人間の子に戻るのだった。当時，私は死にたいという病にかかっており，忍び寄ってくる熱が私を焼き尽くし衰弱させていた。こうした熱に浮かされた夢のなかにこそ好機とばかり，くるくると変転してやまない幻像や感覚が人の魂のなかに平気で進入し，通り抜けて行くのだ。

あの時期，私は大変な熱心さと心の痛みを感じつつ，むさぼるようにシェークスピアを読んだ。そして遂にこの詩人のすべての女性をこの躾のない，人工的に撓められたことのないユダヤ娘に重ね合わせて見る空想に耽っていた。甘いイマジンよりもむしろ噛みつき屋のカタリーナ。ヘレーナよりも少しロザリンデに似ている。ティターニアは，オリヴァーはどうだろう，シルヴィア，オフェーリア，イエシカそしてポルティアではどうだろうか。といった具合にすべての登場人物と引き比べて重ね合わせてみるのだった。

イエミマ・レーヴはシェークスピアなど読んではいなかった。そもそも生まれてこの方そんな男のことなど一切聴いたことがなかった。彼女は私の取り留めのない話から，いろいろと聞くけれど，私が彼女をキリスト教徒でありながら，異教徒的でもある女性と比較したというこの一点のみ理解し，不信心に薄く笑った。そして秋の半ばのある日，最初の秋の気配が急に襲ってきた日のこと，リラの木の葉がその他の木々とともに錦織り成すようにとりどりの色を見せ始めた日のこと，――それは全く秋真っ盛りの日のことだった。彼女は私の手をしっかり

と握って，墓地の壁へ向かう薄暗い小道を，ある墓のほうへ誘った。それは私たちがこれまで一度も見たことのない墓だった。

この墓石を指差して，彼女は言った：

「これは私なの！」

その墓石の表面にはヘブライ語でこう書かれていた。

マハラト

そして，その下の年号は，

1780とあった。

私はどんなに驚かされたことでしょう。

私は凍りついたようになり，ことばを失って傍らの少女をまじまじと見つめていた。それは全く愚かそのものであった。

そうなのです。その子は笑っていなかったのです。この嘘っぱちの馬鹿げた偶発事をからかい気分で演じているのでもなかったのです。まじめに悲しげに，腕を十字に組んで立っていた。そして石に寄りかかりながら，問い返すのを待ちきれず，語り始めた。

「彼女はマハラトといいました。彼女はマハラトだったの。つまり，いわゆる踊り子だったのですね。彼女は私と同じ，心臓に病気があったのです。そして，この私たちのベト・ハイム（ユダヤ人の古墓地）に埋められた最後のものだったのですからね。――完全に最後のものだったのです。それ以後，よき皇帝ヨーゼフが，私たちの民族のうちの誰ひとりとして，もはやこの墓地に運び入れられてはならぬと，命ぜられたのです。こうしてこのマハラトが最後のものとなったのです。そのとき皇帝はユダヤ人街の壁を打ち壊しました。そして彼自身の情け深く光栄に満ちた名前を，彼らの町に，彼と私たちの名誉のために与えられたのです。彼はこの囲いの壁を破壊し，他の民と同じ呼吸を私たちにさせようとしたのです。イスラエルの神が彼の遺骨に祝福を給いますように！」

「しかし，マハラトって誰なの？マハラトと，イエミマ，君はいったいどんな関係があるのだい」と，私は叫んだ。

「彼女は心臓に病気があったの。そしてそれが破裂してしまったの！」

「馬鹿なことを言ってはいけない。この1870年に埋葬された死者について，君がいったい何を知っているというのだい。」

「私たちは長い間，私たちの民族について記憶しているのです。私はマハラトのこともよーく知っています。そして，彼女の運命は私のものとなるだろうということも分かっているのです。」

「なんて馬鹿なことを！」私は叫びました。しかし，イエミマ・レーヴは突然，手を胸に押し当てた。すると，まるで大きな身体的苦痛に耐えているかのような表情が彼女の顔を掠めた。

私はまたしても激しく驚かされた。彼女が私の手をとり，それを彼女の胸に当てたとき，私

はもっと驚かされた。

「聞いて御覧なさい。心臓がとんとんと音を立てているでしょ。そして時々激しくぽんぽんと音を立てているでしょ，ヘルマン。これは死の早鐘なの。私の埋葬を知らせる死の鐘なの。あなたは偉いお医者様でしょ。あなたはそのことに気が付いてはいなかったの。」

この最後の言葉を彼女は非常に明るい笑いとともに言い放ったので，先ほどの死の考えが却って，一層気味悪く思えた。私は少女の両手をしっかりと握って，怒って，彼女に向かって叫んだ。「そんなつまらない仕方で冗談を言ったりするもんじゃない！私はどんなことでも大目にみて見逃してあげよう。でも，いまの言葉だけは別だ。」

「冗談じゃなんかじゃなくってよ」と，彼女は応えた。「私はあなたにマハラトの話をしてあげるはずじゃなかったのかしら。」

あるぼんやりとした，際限もない不安に満ちた苦痛に襲われながらも，ただ私はかろうじて頷くほかなかった。

イエミマは語った。

「ここに眠る女性はマハラトと呼ばれていました。なぜなら彼女の体つきはほっそりとして軽快だったからです。そして彼女が歩くと，まるでダンスでもしているような典雅さだったのです。私と同様，彼女も汚塵と暗さの中に生まれたのです。確かに私と同様でしたけれど，もっとひどい汚塵とはるかに暗い闇の中に生まれたのです。なぜってあの強力な女帝マリア・テレジアの支配する時代でしたから。プラハのユダヤ人の町は今日よりももっと悲惨な場所だったのです。そして彼らは我々が新鮮な空気を吸うことを惜しみました。しかも我々は年毎に211000グルデンをここ，靄のかかったくらい場所でやせ衰えていくことを許すという，いとも慈悲深い許可に対し，支払わねばならなかったのです。しかし，マハラトはこのプラハの町中でもっとも誇り高いクリスチャンよりももっと自由な魂をもっていたのです。彼女もまた本の中から学びとり，繊細な手でリュートを奏でたのです。彼女は私たちの民の間では，真珠と呼ばれていました。ちょうど高師ラビ・イエフダの真珠がそう名づけられたように。彼女は暗さの中に生まれ，光を求めたのでした。あらゆる民族の多くの偉大な男たちもそれを求めて死んでゆきました。いったいなぜ，そのために哀れな少女も死ぬことが無いなどと言えるのでしょう，ヘルマン。あなたは何をそんなに私を見つめてるの。あなたも少女というのはただ恋のためにのみ死ぬのだと思っていらっしゃるの。そんな風に思っては駄目です。マハラトはたとえ彼女の心臓が破裂しようとも恋のために死んだのではありません。彼女を力づくで父親の家から拉致し，やがてマリア・テレジア女帝陛下が国外追放の判決を下し，国を出て行かなければならぬ羽目となった若い伯爵への恋のゆえに死んだのだとする人々の考えは間違っているのです。マハラトは家名，富，ビロードの服と羽根飾りの付いた帽子，これらを取ってしまえば，ほかに何もないこの愚か者を笑っていたのです。彼らは彼女を踊り子と呼びました。一方，彼女は，彼女の魂が彼女の民族のゆえに耐え忍んでいることを外部に表すには，あまりに誇りかであったので，その故に死んだのです。彼女が太陽を見あげる唯一の場所が，ここベト・ハイ

ム（ユダヤ人の古墓地）だったのです。彼女はこれらの墓石の下に横たわっているひとびとの歴史を学びました。そして彼女の魂は，死者たちが彼女を連れ去り，引きずり下ろすまで，これらの墓石の上でおどっていたのでした。己たちのもとへ，自己のもとへ！―― あちらへ！」

私の傍らでその若い娘はこの短い言葉「あちらへ」をどんなふうに発音したことか！

「イエミマ」と私は叫んだ。私は何をしているのか分からないままに，両手を祈るように組んで，「イエミマ，僕は君を愛している」と叫んでいた。

しかし，彼女は私に向って脅すように指を突き出し，腹を立てて小さな脚で地団駄を踏んだ。「それは違うわ。金のモールの縁取りの付いた緑色の服を着た若い紳士は，白い羽根飾りの付いた帽子を被った若い紳士は，マハラトを愛していなかったのよ。それに彼女が彼のために死んだという人たちもみーんな嘘つきなのよ。彼女は心臓に欠陥があったのよ。私たちの死んだ民が彼女を自分たち自身の所へ引きずり下ろしたのよ。あなたは私を愛しているといいます，ヘルマン。けれど，私が彼女みたいに今のこの時に，死者のところへ降りていくことになっても，あなたのその手で私を押しとどめようとはしないでしょう。」

どんな風に彼女は私をみつめたことでしょう！それはあたかも彼女の黒い瞳が私の心の最も奥底に隠れているものを取り出そうとするかのようでした。私がほんとうに彼女を愛しているのでしたら，私はこのまなざしに耐え，応じたことでしょう。しかし，彼女が正しかったのです。私は彼女を愛していなかった。私はただ熱病にかかっていただけなのです。そのとき私は目を逸らして，うつむいたのです。

私は間違ってはいなかった，裏切り者でもなかった。全く悪意など，この貧しい少女との交際中に一度だって心にきざしたことはなかった。この苛む不安，この良心の呵責はいったいどこから生じたのだろうか？おずおずと，殆ど恐怖に近い思いでこの晴れやかな生き物を見たとき，私は恐ろしい責任が私の上にのしかかったのを感じた。目をきらきらさせながら，こぶしを握り締めて私に突きつけた。こうして絶望の中で ―― 自分自身の愛に抗っていたのだった。

「ああ，イエミマ！イエミマ！」と私は叫んだ。そしていまや我々は互いに向き合って，目と目を見つめ，覗きあった。次第次第に彼女のまなざしは穏やかになった。それは完全にしっとりとうるんで輝いていた。こぶしを固めた手は開かれ，私の腕の上におかれた。

「心を痛めないで頂戴，わたしのお友だち。あなたには何の責任もありません。あなたは私に，余計なことばかりする役立たずの何も知らない小さな娘にたくさんの喜びを運んでくれました。それにわたし，あなたにとても感謝しているの ―― ああ，本当に。神さまが胸の中にそれとお決めになった大きさよりも大きくって，はみ出したがる馬鹿げた心臓を私が持ってることについてだって，あなたにはなんの関係もないことだわ。この心臓がどんなふうに鼓動しているか分かるでしょ。私たちのユダヤ人街にも偉いお医者さまがいるの。ドアの向こうで彼女と私のお母さんが私のことを話しているのをこっそり聞き耳を立てて聞いたの。それはこういうことで間違いないの。私はあまりに大きくなりすぎた心臓のせいで死ななくちゃならないって。」

「イエミマ，イエミマ。僕は君のためにもっとよい医師を連れてきてあげよう。彼らに君の胸を診てもらおう。そうすればきっとこういうに違いない，あなたは勘違いをしています。その年取ったいんちき治療医は間違っています」と，私は叫んでしまった。「君は生きるのだ――ずっと長生きするのだ。そして美しい，典雅な乙女となって，この埃と腐敗の中から，この太古の昔から立ち上る悪寒の中から出て行くのだ！」

「いったい何処へ行くというの。いいえ，私はここにずっといます。神殿の破壊後ずっと私の先祖たちが埋葬され，眠り続けるここここの場所にいます。あなたは，しかし，私の友だちのあなたはあなたの故郷にお帰りになるでしょう。そして私のことを忘れておしまいになります，ひとが夢を忘れるように。そう，私もひとつの夢にすぎないのです！夢なら終わりがあるのです。そして青白い，分別のある朝が貴方を目覚めさせるのです。それからあなたはこう言うのです。何にもなかった，と。だからといっていったいあなたに何が出来るというのでしょう。お行きなさい，すぐにお行きなさい。それがあなたの，そして私の運命なのです。あなたのお国であなたは教養のある，立派な紳士とおなりです。貧乏人や弱者に親切で慈悲深い紳士におなりでしょう。だってほんとにあなたは優しく慈悲深かったのですもの。そして私も貧乏で弱いものなのです。それに，あなたはそうしようと思えば，あなたは私にたくさんの苦痛の種を作り出し，与えることだっておできになれたはずです。たくさんの悪戯を私に準備する事だって出来たのです。いま，このリラの木は花盛りです。そして，私も生きています。でも，この老いた木や茂みが来年の春再び花々を咲き交わし，この墓上に豊かに垂れるとき，私は私の石の下で，この踊り子のマハラトのように，強力な女帝マリア・テレジアの手によってある年死んだ彼女のように，安らぎと静寂のうちに横たわっていることでしょう。いったいいつまで，あなたはプラハのユダヤ人街のイエミマ・レーヴのことを，リラの花咲くたびに思い出すというのでしょう。

もう一度，私はこの愚かな話を言い負かす分別を総動員して話そうとしてみた。しかし，成功しなかった。それに対する腹立たしさがむしろ私の中で優位を占めていった。結局，二人は黙りこくって，踊り子の墓の傍で並んで立ち尽くしていた。すると私がこの場所にやってきたあの最初の朝と同様，幽鬼の手のように陰気な気配が，この明るい昼の日中にしっかりと私を掴んだのだった。それはまるで姐虫の塊りであるかのように地の表面をずるずると蠕動していた。そこら中いたるところで褪色した，青白いねじれた手が下から墓石を押しあげているかのようであった。木の葉や草は互いにこすれあい，音を立てていた。私は渦巻く屍体たちの間に立っているかのようだった。命ある腐敗物のすべてがニヤニヤと笑いながら，私と私の隣にいる美しい少女に向かって迫ってくるようであった。

最高に不思議なことだが，ダンツイッヒ出身のひょろひょろののっぽの紳士とハンブルク出身の太っちょの紳士が門番の伯父のところを出て，偶然にもベト・ハイムの中へ入ってきたが，些かも恐怖など感じていない様子だった。彼らは全く落ち着いて，ズボンのポケットに両手を突っ込んで歩いてきた。そして朽ち果てたことごとくの世紀に向かって，裸の小銭をちゃらつ

かせ，落ち窪んだ目に薄笑いを浮かべた顔に投げ入れていた。この二人の紳士が通り合わせてくれたことも，このなんとも言いようのない不気味さを完全に追い払う助けにはならなかった。その反対に彼らはこの状況にますます凄みを加えた。なぜって，彼らは自分の身の回りで，自分の足元で何が起きているのか全く気づかないでいるなんて，あまりに自然に逆らったことではないか。

彼らは私たちのほうへやって来た。そうして私は，ハンブルク出身の紳士がダンツイッヒ出身の紳士に向かって，私はひどく高名な —— しかもそれは間違っているのだけれど，有名になってしまったこのプラハのユダヤ人墓地を，永劫の罰を下されたペテンで，悪魔に仕立て上げられたとんでもない古い石切り場以上でもまた以下でもない場所と，断じて思っているのですよと，言っているのを聞いた。そこで私はもう一度全力を奮い起こして，手で額をぬぐい，こう叫んだ。

「違う，違うのだ。これがおかしな話というものだ！これが病的な幻想なのだ！こんな愚かなものにそんなにも驚き怖がって追っかけ回されているなんてどういうことだ。もし私が病気でないのなら，私はこのふたりの紳士と全く同様，平静にここを散策しているはずなのだ！」

「それに逆らったりしてはいけないわ」と，しかし，イエミマはいった。だが，ちょうどそのとき，門番の伯父といっしょに見知らぬ二人の紳士が近づいてきたので，私から離れていった。マハラトの墓を軽々と跳ね越え，身をかがめて隠れ，リラの茂みの下枝の陰にするりと滑り込んだ。そうして緑の中からもう一度，振り返り，彼女の癖で指を口に当てて，叫んだ。

「リラの花を忘るな！」

それから彼女は消えた。そうして —— 私は二度と再び見ることはなかったのである。人間の手が何ものもしっかりと掴みとめておくことが出来ない子どもの手である事は，辛い真実とばかりはいえないのではあるまいか。何かひょいとした調子に，きらきら輝いたり，愛らしかったりするもの，あるいはまた手をつけることを禁じられたりするもの一切に子どもは手を出しせがむ。しかし，子どもの手は幼稚な好奇心に駆られて，一方でそれを壊すかと思えば，または他方で傷つくかあるいは恐怖に駆られて取り落とすかするものだ。

「この石の下に横たわるマハラトとはいったい何ものなのです」と，私はこの二人の北ドイツの紳士が遠のいてから，門番に尋ねた。

老人は肩をすくめて見せた。

「彼女の子孫ならまだこの地に生きていますよ。私たちのところでは有名な一族でしてね。しかし，まあ，あまり一般にそのことについては何も話したがらないのですが。彼女の死，彼女の身に起きたこと，それはもう四十年この方，たくさんの作り話がなされ，尾鰭が付いたものです。彼女はクラインザイテにあるマルテザール広場に住む若い殿方と恋愛関係にありました。しかし，私たちはかなり名誉を重んじる民族なので，ですから，従って厳格な民族であるのです。ということは，非常に残忍でもあり得たのです。そこでこの哀れな生き物はその生を苦悩のうちに閉じてしまったというわけです。いや悲しい話でして。」

老人は私のためにもベト・ハイムの門を開けてくれて，物憂げに頭をふりながら，私の後姿を見送ったには，それなりのわけがあったのだった。まるで酔ったように私はこの日一日，あちらこちらさ迷った。そして私の罪と無罪とを互いにはかりにかけ，比べてみたものの無駄なことであった。私の魂からこの重荷を取りのけようと，あるいはこの若い娘のいった言葉を，愚かな子どもの頭が紡ぎ出した無意味なたわごととして，幻想として自分に言い聞かせてみたりなどして，多少なりと重荷を軽くしようと可能な限りの手段を講じてみた。しかしどれも無駄なことであった。とうとう私はネッカーツアルカー横丁の方へふらふらと戻ってきていた。私の書物と不完全でだらしない大学ノートを取り出し，ちりちりと神経質にそして貪るように，人の心臓に関する，即ち肉体の心臓に関する機能と健康と疾病が扱われている箇所の一切を読んだ。私は後年，自分自身でこの疾病に関する本を書き上げたのだ。その本は非常に実用向きの知識によって解説が施され，多くの版を重ねることになった。―― ああ，心臓の権威としての名声が私にどれだけの代価を支払わせたのか，せめて学問が承知しておいてくれれば！苦悩と不満から生まれるのは詩人の作品に限ったことではないことを！

この日は大変蒸し暑かった，白く重い雲が屋根に垂れ込め，重なり合った屋根の上でうねうねとのたうっていた。そうして威嚇するような鉛色の大きな塊りへと変じていった。空気は殆ど息苦しいほどになっていたが，再び部屋をでて，暑い路地へと私を駆り立てた。

いま，最初の雷鳴が鈍く鳴動し，街の窓をぴりぴりと振動させたとき，私は今一度ベト・ハイムのほとりの門番の家のカタカタと音を立てて揺れる呼び鈴の紐を引いた。

長い頬鬚の畏敬の念を起こさせる灰色の頭の老人の代わりに，門番の老いた召使の女がしわくちゃの黄色い顔を，開いたドアの間からのぞかせた。

「ご主人はどちらですか。私は彼と話をしなくてはならないのです。―― いま，ここで！」

「まあ，なんていうことでしょ。ひどいお顔をなさって，あなた！まあ，いったい何が起きたというのでしょう。それにいったいもう一度なにをなさりたいとおっしゃるのです。いったい何があなたをこの場におびき出したので御座いましょう。」

私は彼女にはこたえずに，しゃべっている女の傍を通り過ぎ，押し進んだ。暗い通路を通り抜けて ―― いまや一方で嵐含みの気配のなか，ぎょっとする，不気味なほどに暗い墓地への通路を通り抜け ―― 私は急いだ。高師ラビ・レーヴの墓石のほとりに老人は佇んでいた。彼はますます激しく炸裂する荒天を気にも留めず立っていた。

このような時に，このような場所を見たことのない人には誰もそれがどんなものかまるで知るまい。天が「毛織の粗布のように」暗くなり，閃光が突き抜け，雷鳴が轟き炸裂するそのときに，その震動を頭上に感じながら，頭を垂れ，一番新しい審判の開始を待ち望む，そんな場所はこの全世界のこの場をおいて外にまたとあるまい。ああ，この年経たリラの茂みがいかに身をよじり，嵐に向かってなおも立ち続けようと悶えたことか！まるで生あるもののように呻き，激しい苦悩の中で吼えていた。外の木々や茂みが雨に打たれてざわざわと音を立てているのとはちがった。どこか不吉な，ごうごうという音を立てて雨水は地表を流れた。互いに折り

重なって瓦礫の山となった墓石から音を立てて流れ落ちていた。――そう，それはまさしく「全能なる神による滅ぼし」のようであった。

私たちはこの嵐の暴威を幾分でも凌げそうな一隅を探した。そうしてあの踊り子，マハラトが埋葬されている側の壁の一角に，今，ようやくそれを発見した。その場所で私は老人に話した。彼に黙っていることは出来なかった。私は彼にイエミマと知り合うことになったことから，つまりことの最初からすべてを話して聞かせた。出来る限り分かりやすく，はっきりと交際の一部始終を包み隠さず語った。私は彼に毎時間，毎分の顛末を伝えずにはおれなかった。

彼は，一言も口を挟まず，ただ私が話すに任せていた。私がとうとう息をきらしながら話の終わりにたどり着いたとき，彼は骨ばかりの固い手で額と髪をなであげながらいった。

「私の息子よ，あなたは正しいのだよ。それに私はあなたがしたことの一部始終を私に聞かせてくれたことを喜んでいるのだ。軽率に突き動かされなかったことと，トロンボーンのような大きな警告の声を聞いて初めて目が覚める羽目になることもなかったことは良心にかけて，なかなか気高いことだ。あなたに感謝しておりますのじゃ。こうしてあなたの心をすっかり打ち明けに来てくださったことをね。あなたも私が怒りの言葉を浴びせて悩ますのではないかなど，心配する必要はありませんのじゃ。――この墓石の間を歩き回る人は誰でも，ここのこの場所の空気を吸う人は誰でも，同朋の行動に穏やかなまなざしをもつことができるようになっているのです。あなたは私にもっとひどいことだって報告できたのだからね。そしていつも，もっとおぞましいことがここに埋め込められ，またそれによく似た類のことがまつわって，ここで墓となっている例はたくさんあるのだよ。配剤された苦しみに侮蔑の嘲笑を浴びせ，冷笑し，そしてもてはやされたゴシップを採り上げる悪しき仲間となりませぬよう，神の御加護を祈ります。これまでのあなたは軽率で，無思慮でした。――昨日，遊びであったものが，今日はまさに心血が涸れ果つる厳しきものとなる事もあるのです。考えもしないうちに小さな火花は火焔となり，やがてひどい苦悩と不安に悶え，吾とわが身を叩くことになるのです。そうしていくら叩いたところで，もう消すことも何も出来ないことになるほどに。かわいそうなイエミマ！いつもあの子は不思議な子でした。――私が私のこの年経た怖気立つ庭を遊び場にするあの子を黙って許しておいたのがよくなかったのです。しかし，私のような老いた愚か者が，あの子を夏の日だというのに多くの日々を私の傍らのこんな場所に縛り付け，ほかの子ならばさしずめ妖精や朱儒が登場する御伽噺を聞くだろうときに，これらの墓石にまつわるできごとを精緻に聞かせてやる必要などいったい何処にあったのでしょうね。あの子の心臓が病んでいると，あの子が言ったのですね。辛いことだが，そうであることについてもいったい誰に責任があるというのでしょう。…しかし，こんなことにならないことだってできただろうに。なんと言っても，あの子はまだまだ半人前のこどもです。私たち大人にも，私たちが犯した罪をまだやり直す事だってできるというのに。死者たちがあの子に関わっていたなんて！私はこの壁の内側でだけ生きて行くことが許されていましたものですから，私はあの子の若さをもここに一緒に封じ込めてしまったのです。それであの子は外の横丁の汚濁から多分守られつづけ

てきたのでしょう。でも，しかし，あの子はここでのみ太陽と春の花を見て過ごしたのです――死者たちの太陽――そして――墓地のリラの木！――しかし，あの子はもうここへ足をふみいれてはいけない。あの子はほかの子同様，人生を見つめなければいけません。あの子は死にはしません。私たちの――いや，私の罪によってあの子は死んだりは致しません。――それとも？」

私は答えることが出来なかった。再び紅い閃光が私たちの頭上を一瞬鋭く走った。そして再び雷鳴があたりを震わし，鳴動した。

「あなたもこの場所に二度と足を踏み入れてはいけない」と，老人は続けた。「あなたにとってもふさわしいことじゃありません。あなたもこうしたところで息抜きをするなんて，まだまだ若すぎます！行っておしまいなさい。もしあなたの姿が明日早朝になってもまだここプラハで見かけられるようであれば，わが身を呪うがよい。」

「あなたは私を彼女から遠ざけたい，そうなのですね。いまあなたは私を彼女から引き離したいのですね」と私は叫んでしまった。「ああ，それはよくない。そんなことをしたら彼女はよくならないのです。御老人，あなたも生あるものについては何も知っちゃいないのです。後生だから，私をあのかわいそうな娘から引き離さないで下さい。――もし，あなたが私をいまここから追っ払ったりしても，少しも事態はよくなりはしない。」

「私たちには何の選択も残されていないのです」と，老人は再び穏やかに言った。「あなたはあの子と負けず劣らずの病気の子なんです。治療というのは双方にとって別離の中にのみあるのです。」

私はこの無慈悲な老人に向かう武器などひとつとしてもっていなかった。彼は脅したり，懇願したりした。そして私は――結局，それがよくないことだと分かっていたけれども彼に譲歩したのだった。そうして私はプラハのユダヤ人街のかわいそうなイエミマを見殺しにしたのだった。それだからこそ，他のひとならば誰もが楽しみながら，うち眺める花，リラの花は私にとっては永久に死と最後の審判の花であったのです。

私は逃げたのです。だが私は私から逃げ出したのではない。私は私を呼び戻そうとする哀訴する声を聞くまいと私の耳をしっかりと塞いだのだ。私はその声を，しかし，夜となく昼となく聞いたのだった。

私はそののち，その年の冬には既にベルリンで勉学に打ち込んでいた。ちょっと見たところではそうは見えなかったでしょうけれど，――現実には勉強したのでした。私もまた，人間の身体的欠陥や疾病を事とする学問以外の学問が私に可能であったとは思われなかった。が，ともかくこの学問は私の性にぴったり合っていたに相違ありません。それに苦しくはありましたけれど充足感にみちてこの学問に自己を注ぎ込んだのでした。そしてやがてその過程にこそ，均衡のとれた安らぎを見出したのです。後になって，嫌な寒い冬でしたねと人が挨拶をすることがありました。が，しかし，雪や嵐が，また凍てつく寒さが私に何かそのような気配を感じさせるということすらなかったのでした。新しい春がやってきて初めて，私はこの不幸な状態

から目覚めて行った。しかし，それは健康な目覚めではなく，ただ冷たい幽霊の手の接触下に乗り着けることでした。

私はぎくっとして急に立ち上がりました。しかし，そのとき私が確認したのは，そ・こ・に・誰・も・い・な・いということだけでした。

それは1820年5月9日，日曜日のことでした。私はシェーンハウザー門の前の手入れの行き届いた庭に腰を下ろしていました。私は自分がそこへ行くように，どんな風に促されたものか分かりはしませんでしたが，行っていたのでした。私の周囲には春の客たちの歓声が飛び交っていました。子どもたちは遊びに興じ，老人たちはおしゃべりをし，恋人たちは見つめあい，そして静かにささやきを交わしていました。私はひとりぼっちで私のテーブルに腰をすえ，なかば夢見るように，私のグラスの中を覗き込んでいた。と，そのとき寒気を感じたのです。今私の身の回りに満ちているほどに色美しく晴れやかな賑わいが，かつて私に恵まれたことがあっただろうか。しかし，今，差し当たりこの時点の私にはそれはどうでもよいことだった！

この瞬間，冬は過ぎ行き，はや春となったという確信が私をおそったのです。まるで一瞬の啓示のように。

私の半分人影から隠れた場所から程遠くないところで，ひとりの少女が明るい声で，心の底から生まれ出る哄笑を響かせた。―― しかし，この瞬間，私はプラハのユダヤ人の古い墓地にいた。太陽はリラの茂みの向こうから差し込んでいた。高師イエフダ・レーヴ・バール・ベツァーレルの墓標の向こうでイエミマが愛らしく笑っているのだ。いますぐにも美しい顔と姿が苔むした墓碑の上からひょいと現れるに相違ないのだ。私は立ち上がった。と，もちろんこのファンタジーも消えた。私はボーイに今日という日を尋ねた。そしてそれを聞いたとき，私は驚きのあまり，それをくりかえしたのだった。

私は立ち上がり，私の周りを見回した。木々は緑に燃えていた，今を盛りと花は咲き誇っていた。空気は暖かく，空は晴れていた。―― 春，になっていたのだ。私がちっともそれと気づかぬうちに，たくさんの人々には既にやってきていたのだ。そして古来，多くの詩人たちはかこちつつ，この事態を歌ってきた。人がこんな風に目覚めるとき，人を不意打ちにする大きな不安と戦慄は常に詩の格好の感謝すべきテーマであった。この，人生のそれと察せられることのない滑り出しは，哀れなる人間が折り節に思いを凝らしてみる，あのまことに辛い出来事の中にも混在しているのだ。

リラの花も咲いていた。―― 私の頭上に，そして身の回りにも。ちょうど，蕾みの苞ごしに白く，仄かに赤みを添えながらちらちらと陽光が漏れていた。きらきらと光る緑の葉はさらさらと葉ずれの音を響かせていた。花房は静かに，まったく音も立てずに揺れていた。翌日，私はプラハへ旅立った。夜中そこへとまねぶ霊と激しく，そして虚しく闘った翌朝のことだった。――

私は日に夜をついで先を急いだ。しかし，蒸気機関車もない当時，今日の私たちでは言い表せぬほどゆっくりと地を這うようにのろく進んだ。ようやく5月15日の午後，私があんなにも

恐れていた町に到着した。遠くから，早くもあの厳かな鐘の響きがすべての教会が，これから私が迷い込むであろう雑踏を伝えて遣した。翌日は土地の守護神，聖ヨハネス・フォン・ネポムクの大祭であった。村人はこぞって十字架や旗，聖水容器や聖徒の肖像を携えて，女王ヨハンナの哀れな贖罪師を賛美する古謡を口ずさみながら，私と同じ道を町まで歩いた。昔の市の灰色の姿を見出すことはほとんど不可能に近かった。すべての家々は破風に至るまで，緑のテープや花綵，小さな織物の壁掛けで飾り立てられ，至る所に祭りの灯火のぼんぼりが下がり，準備万端整っていた。横丁も，広場も，殆ど通り抜けられぬほどの混みようだった。まるで渦に捕まった泳者のようにもがき，方角を見失わぬため，渦の中で激しく苦闘しなければならなかった。散々骨折ったあげく私はとうとう，今はヴェンツエル広場と人は呼ぶようだが，かつてのロスマルクト広場の黄金の鵞鳥館に宿を取った。「ホテル案内所」で用意された部屋は広さは特筆すべきものはなかったが，窓からの眺めとなるともっと採り上げるべきものは何もない部屋だった。その部屋の唯一ある窓からは，高い建物と柱廊に囲まれた細長い中庭だけが見下ろせた。荷馬車や乗合馬車の途方もない喧騒が互いに押し合いへし合いぶつかり合いを演じていた。それにもかかわらずひっきりなしに続く乗合馬車の後には，新しく到着した馬車のために相変わらず場所があり，絶えず奇妙な色とりどりの衣装をきた新しい一団が降りてきた。御者や馬丁はとにかくありとあらゆる罵りの言葉をボヘミア語やドイツ語で互いに浴びせあっていた。婦人や子どもたちまでが金切り声を上げ，さまざまな騒音がごったがえす中を喚きあっていた。田舎の出身者，小市民そして軍人，こういう人々が馬車から降りるご婦人たちを助けていた。あるものは少しでも楽になるようにと骨折っているかと思えば，こちらでは場合によってはわざわざ邪魔をしていたりした。ちょうど私の向かい側の部屋では仕立て屋が祝いの晴れ着のズボンに最後のひと針を縫っているところだ。顧客は痛さを噛みしめて待っている。あちらではフレンチホルンが窓にあがる祝いの歓声に景気づけをしていた。その上，町中の鐘がまたしても騒々しく鳴り出し，以前にもまして音に麻痺し，ぼんやりと私は窓に寄りかかっていた。

私にとって心晴れる清浄な香気が立ち上って来そうもなかったので，窓を閉めようとしたその途端，私の目はひとりの姿に行き当たった。その姿を見た瞬間，私に完全な記憶の像が忽ち蘇ってきた。

ドイツ人やボヘミア人たちの笑いの輪の中に，けばけばしい色の様々な布やリボンの束を抱えたひとりのユダヤ人が，馬車を降りてきたばかりの婦人や娘さんたちに向かって大声を張り上げ，商いの口上を触れながら立っていた。その場に立つ男が誰であるか私には分かった。その男こそバルーフ・レーヴ，イエミマの父親だ。私は無帽のまま飛び出し，一分後にはもう，その男の前に立っていた。そして鉄のように固いこぶしで彼の腕を掴んだのだ。

「彼女は存命だね。そうだね。彼女は死んではいない，そうだね。あなたは彼女をマハラトのように埋めはしなかったのだろう。」

「こいつは大変！」と，この行商人は叫び，藪から棒の襲撃にすっかり肝を潰した。「いっ

たい，どうしようってんで…？」

彼は私が誰だか判った。そして当然のことだが，ただ時計のこと，私がかつて彼の家へ行ったとき腕にしていた，そしてその後再び返されることのなかった時計のことだけが真っ先に頭に閃いたのだ。当惑した薄ら笑いを浮かべながら，私の顔を覗き返した。

「神さまはわっしを百年だって生かしておこうていう魂胆か。これは，これは麗しの敬意を表すべき学士さま —— いやはやなんてこったア。えっ，何であれが生きてないなんて事がありましょうか。—— あれは一分ごとにちゃんと動いていまさア —— だがねエ，だがですって，お許しくだされ，わっしはあれをもう手元にもっちゃいねエですんで。旦那にわっしでお役に立つことが何かほかにござんすでしょうか。」

私はその男を黄金の鵞鳥館の中庭から連れ出しロスマルクトまで引っ張っていった。そこで私はもう一度私の問いを繰り返した。今度は彼の娘の名前をいいながら尋ねた。と，途端に彼の顔はがらりと変わって，私を無表情に，石のように固く，苦痛に満ちて，じっと見返した。もはや私は彼の答えを待つまでもなかった。ちょうどそのとき市場を横切ってやったきた感謝祭の行列が我々を追い立て，離れ離れにしてしまった。否応なく人の流れに押し流され，追い立てられながら私は運ばれていった。

しかし，ユダヤ人街はまるで死んだように静かであった。ああ，なんという寒々とした戦慄の走リ抜ける静けさだろうか！ふたたび私はベト・ハイムの呼び鈴をひいたのだ。そしてまたもや玄関の垂れ板が明けられ，皺くちゃの，ほぼ百歳になっていただろうこの墓地の門番の顔が覗いた。と同時に閂が抜かれた。

「そこにあなたがいるなんて！」と，老人は頭をふりふり言った。「私はあなたにはもう一度お目にかかることになるだろうとは思っておりました。どうぞ，こちらへ！」

彼はもう歩きはじめていた。私は彼のあとについて木陰の通路を歩いていった。するとさきほどの大都市プラハの祭りの喚声の喧騒は，死の沈黙のなかへ深く沈んでいった。満開に咲き匂う花もたわわに墓地を覆うリラの木の繁りはまことにきらびやかであった。しかし，その茂みに鳴く鳥は一羽としてなかった。

「ところで，彼女はやはり逝ってしまったということは御存知でしょうな」と，老人は尋ねた。

「私が死者たちの間に置き去られ，—— 私の喜びの種は私から遠ざかったのです。最後の花は摘み取られ，最愛の声はますます遠ざかっていく，我々はもはや二度とその声を聞くこともない！」

静かに彼は私の手をとった。「泣いてはいけない，私のかわいそうな息子よ。ただいつもこの同じ言葉を口にし，嘆くことのみが許されているのです。涙を流したとて彼女は決して再び私たちの所へ戻って来はしないのだ。ひょっとしたら私はあなたをあの時追い出すんじゃなかったのかもしれない。しかし，いったいあのとき，こうするのが正しいのだと言い切れる人間がいただろうかね。一週間前，あの娘は埋葬された。私たちは幾人もの名医の先生方に彼女を

診てもらったのだが，やはりその方々もあの娘を救うことが出来なかった。あの娘の言ったことが正しかったのだよ。あの娘の心臓は大きすぎた。あの娘の死をあまり自分のせいだなどと考えちゃいけない。あなたもあの娘と同様，あの時は病気だったのじゃ。偉い先生方の皆さんがおっしゃってくれたもんです。この娘はもはやそう長くは生きられまいと。私の息子，あなたのことは，あの子はただひたすら明るい喜びと和やかなやさしい言葉だけを記憶していたのです。あなたはあの娘の貧しく，短く暗い人生のいわば太陽の輝きだったのです。あなたによってあの娘は青空を，生き生きと活気ある者の世界を知ったのです。あなたはあの娘にたくさんの喜びと幸福を運んでくれました。そしてあの娘はあなたに捧げる何千という祝福の言葉を唇に載せながら眠っていったのです。ああ，それは大きな，美しい，悲しい奇跡でした。彼女の本質と彼女の考えをまったく変えてしまったほどに。神はあらゆる民に最善をなす術を御存知です。神は彼の子たちをことごとく暗闇から，囚われの囲壁から救い出し，光と自由のなかへ導く最善の術を御存知なのです。あの娘はまことに美しく死にました。ああ，なんと美しかったことでしょう。私はあの娘をここにのみ呪縛しました。けれども生命の神はあの娘を私から奪い去り，あの娘を真の「生命の家」へと導いていったのです。―― 神の御名は讃えられてあれ！」

私は老人のこのことばに対してなんと答えたのか，もはや記憶していない。「リラの花を忘るな！」と彼女は言った。そして私は私の存世の限りを尽くしてこの言葉を覚えていなければならない経緯をいまこうして告げ終えたのです。彼女の墓はユダヤ人街の古い教会の墓地にはなかった。慈しみ深き皇帝ヨーゼフは何人たりともかの地に埋葬すべからずときつく禁じていた。マハラトが，人々がそこへ埋葬した最後のものだった。

もうひとりの死者が被っていたリラの花の冠を手にしながら，私は私を通り抜けていった思い出を書き付けておくために，長い時間をどうやら使ってしまったようだ。いま，その花冠を，嘆きに沈む母が私の手からそっと取り上げ，もう一度愛らしい箱の中へしまった。彼女がそれをその箱から取り出したのではあった。

彼女は私の肩に手を置き，

「親愛なるお医者様，私はあなたにどんなに感謝していますことでしょう。あなたは私の苦しみをほんとうにたくさん分かちご負担くださいました。」

私は見上げたが，応えることが出来なかった。暖炉の火は燃え尽きていた。部屋はすっかり冷えていた。太陽は屋根の向こうに沈み，冬の日の輝きは既にすぎさっていた。その歳月が重苦しく，なんとも言えない重みをもって私の上にのしかかってくるのを感じた。

惨めな，しかし，これといって悪いわけではなかった男として，私は再び，永遠に若く，ひたすら物思いに耽るミューズの像の前を通り過ぎた。そして，この深い静かな，冷たい死の家を後にしたのだった。

完